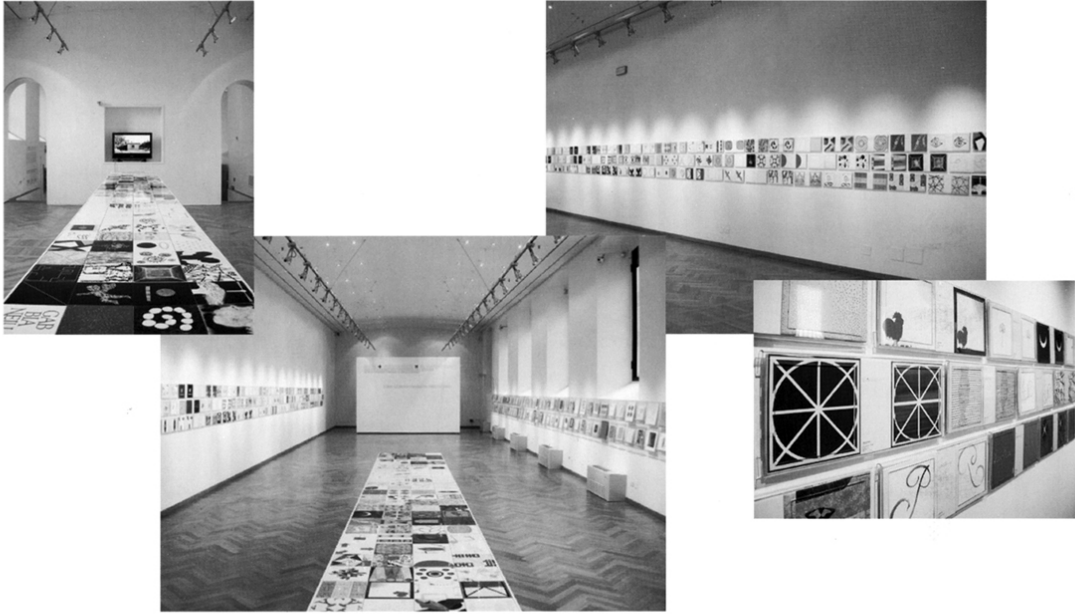


# 楽園用の百枚のタイル



一九五〇年代半ばから、イタリアの建築デザイン界では、プロジェクトへの招待というシステムが繰り返され試みられてきた。より広範なプロジェクトについての調査研究の場へのデザイナーの積極的な参加は、領域を超えた豊かな研究基盤を作り上げることに役立ってきた。それは論理的側面にも、またイタリア内外の製造の現実についても、刺激的な効果をもたらした。現在に至っている。自由な実験と生産の世界との好ましい関係は、このようにして出会うの場を見いだし、かつてなら出会う機会が少なく、対話に欠けていたであろう各種専門領域の、美学上および技術上の言語を変形し編み直すという、相乗効果を生み出すことができようになりつつある。

昨今の企業体の新たな組織力は、イタリアのファッション・システムにヒントを得たものである。同時に、作り手の側も、歴史の必然として、境界を超え関心を広げようとしている。美術、建築、音楽、ファッション等と二〇〇〇年期の文化のエンジニアリングの土台を成す、各領域のプロジェクトのテーマを、より幅の広い手法で取り扱い、再評価しようとしているのである。

百十八人の作家によるタイル・コレクションは、タイル作りの伝統を今に伝える、ガビアネリ社の装飾部門の工房で手作りされたものである。同コレクションは、オークションを介して売却される。その売上金は、モロッコですでに始められているマラケシ建築デザイン国際センター(MAAM)建設資金の一部に充てられることになっている。

それら百十八人の作家によるタイル展覧会は、作家が創作する装飾タイルについて再考をうながそうとするためのものである。インダストリーとアートの関係を見直す機会であり、タイルの表面と素材の関係を記号的に概念化しようとする試みでもある。

製造するという行為についての再考に加え、知るという行為、分析と共有への欲求が、情報とコミュニケーションの基本的要素として認められる。もうひとつ重要なことは、経験と変形が可能な意識世界の一要素としての、オープンソースと定義されるシステムの考えの提案を再考する要素としての、アイデアの価値化への試みであるということである。

同展の新しい「楽園用の百枚のタイル」という表題の下に、参加したアーティストたちが、一緒に学校を創設することを目指して、建物など物理的な場とコンセプトの両方を、同時に進行させている点にある。それゆえ、プロジェクトの理論的研究の実際的な面は、本質的な側面、および外部に向かっての迅速なコミュニケーションの側面と一体化し、溶融している。それがこの展覧会プロジェクトの性格を成しているのである。

文・セルジオ・カラトローニ(東京大学総合研究博物館・客員教授)